



ほうさ 第18号

1984年5月

名古屋市蓬左文庫

Nagoyashi Hôsabunko

展示屋 よ り

中 古 文 学 展

— 平安朝の和歌と物語 —

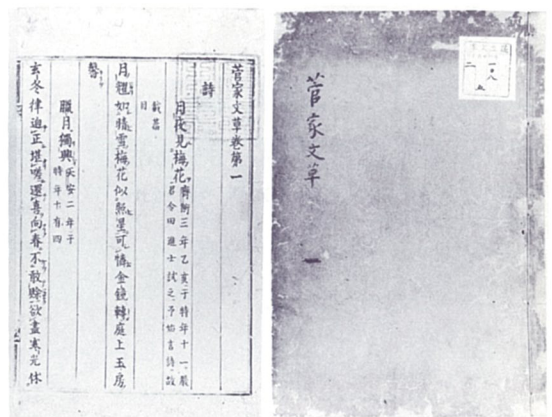
5.12(土)～6.10(日)

日本の文学史上「中古」と呼ばれる平安時代は、延暦13年(794)の桓武天皇による平安遷都にはじまり、建久13年(1192)、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの約400年間をさしている。政治的には、藤原氏による摂関政治が出現し、院政期を経て武家政権の時代へと移行する時代であり、文化史上では、中国文化の影響を脱して、日本独自の文化が誕生し、発展した時代にあたる。とくに、文学においては、仮名文字の発生により、漢文によらない日本語の文学＝国文学(和歌・物語・日記・随筆など)が続出し、平安時代中期(10世紀～11世紀)には、まれにみる王朝女流文学の全盛期をもたらした。

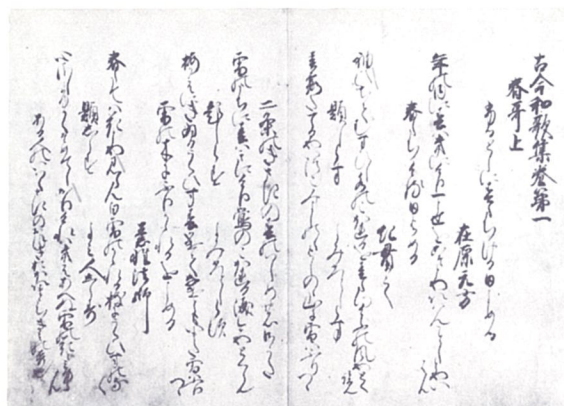
今回の展示は、古典の宝庫として知られる蓬左文庫が、平安時代の文学を和歌と物語を中心に、本文庫所蔵の古写本・古刊本によって概観しようとするものである。

平安時代の文学を特徴づけるものの一つに仮名文字の発生を挙げるとしても、仮名文字が漢字の借(仮)文字としてではなく、日本語をそのまま表記できる国字として普及するのは、9世紀後半以降のことである。平安時代初期の文学の主役は、漢詩文であり、とくに三勅撰集(「凌雲新集」「文華秀麗集」「経国集」)が成った9世紀前半は、漢詩文の全盛時代であった。その後、漢詩文は、仮名文学に主役の座を譲ってからも、貴族官僚の正統的教養としての地位を保ち、10世紀以降の有名歌人、女流作家全盛の背景には、漢詩文の伝統が生きていたのである。

「古今和歌集」が漢詩文に代わって、勅撰の和歌集として、宫廷社会の表舞台に登場したのは、醍醐天皇の延喜5年(905)である。「万葉集」以降、漢詩文全盛の陰で、恋愛生活や民謡的な世界の中で生きていた和歌は、在原業平・小野小町など六歌仙活躍の時代を経て、「古今和歌集」によって、公的な地位を獲得することになった。その後、「後撰和歌集」「拾遺和歌集」と、1世紀の間に「三代集」と総称される三つの勅撰集が編纂され、和歌は、貴族の日常生活の中で、風雅な対



菅家文草 (江戸初期写)



古今和歌集（貞応本・室町時代写）

子が二代にわたって校合した河内本系（父子の官職名「河内守」によってそう呼ばれる）と、歌人藤原定家の校合による青表紙本系（定家の所持本の表紙の色からそう呼ばれる）の二大系統に分かれ、さらに少数の別本系のものも存在する。本文庫は、「源氏物語」の宝庫としても知られ。北条実時自筆の奥書をもつ現存最古の河内本（金沢文庫本）を筆頭に、四種の青表紙本（完本）と、四種の端本を所蔵し、その注釈書・研究書も多い。今回は、青表紙本の中からそれぞれ趣きを異にした優美な箱入り本二種（室町時代写・天正8年写）と、豪華な装幀による江戸初期の写本に加え、端本ながら、為家（定家の長子）筆と伝えられる「たけ河」をはじめ、鎌倉時代の三種の古写本、さらに、注釈書としては初期に属する「原中最秘鈔」（編者明魏耕雲〔花山院長親〕自筆本）を展示する。

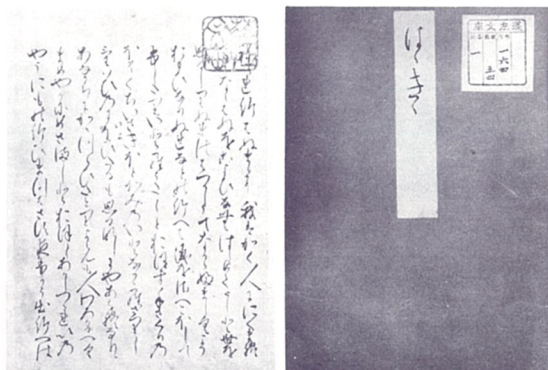
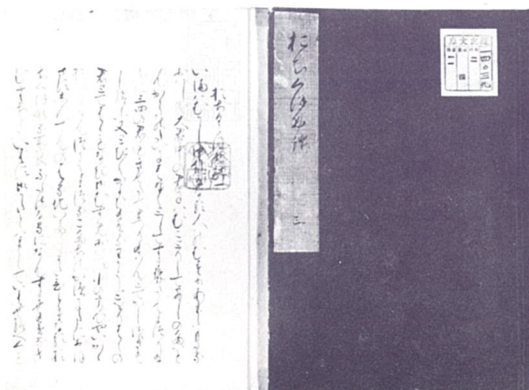
「源氏物語」成立以前の物語文学には、「竹取物語」「空穂物語」「落窪物語」などの伝奇物語と、「伊勢物語」「大和物語」「平仲物語」などの歌物語の二系統があった。ストーリー優先の伝奇物語に、歌物語の抒情性が加わり、さらに唐詩（長恨歌など）の影響もうけつつ、これらが統合・集成されたところに「源氏物語」が成立したといわれている。このうち「伊勢物語」は、もっとも広く読まれ、写本の数も多い。今回は、定家本・武田本など三種の写本をそろえた。また、「空穂物語」は、尾張藩三世綱誠の正室新子の旧蔵書で、全文に朱の句読点がほどこされている。

「源氏物語」以降も、「狭衣」など、いくつかの「作り物語」が生まれ、いずれも「源氏」の影響を色濃く受けていたが、質・量ともに「源氏」を超えるものは、現われなかった。そして、これにかわって登場したのが「栄華物語」「大鏡」「今鏡」などの「歴史物語」であり、さらには、庶民性・地方性ゆたかな大説話集「今昔物語集」が出て、王朝文学の衰兆と転換が示されるのである。

話としてまで用いられるようになっていった。

「三代集」につづく11世紀は、女性を中心とした王朝文芸が円熟期を迎えて、和歌もまた歌会・歌合と、宮廷の社交の場で華やかに展開した。「拾遺和歌集」から80年を経て編纂された勅撰集「後拾遺和歌集」は、この王朝文化の中で生まれた和歌を集大成する役割を果たしている。これにつづく約1世紀におよぶ院政期には、「金葉和歌集」「詞花和歌集」「千載和歌集」と、三つの勅撰集が生まれるが、この間、和歌は、専門化、技巧化の傾向を強め、「新古今和歌集」の時代へと移っていくのである。

「源氏物語」は、物語文学を代表するだけでなく、日本の古典文学の最高峰というにふさわしい作品である。その写本は、鎌倉時代の学者源光行・親行親子



▲源氏物語（紹巴本・天正8年写）

◀おちくば物語（江戸中期写）

「中古文学展」出品目録

〈物語・日記〉

1. 竹取物語 室町末期写 1冊
2. 伊勢物語 定家本 室町時代写 宗祇校本 1冊
3. 同 天福本 室町時代写
(伝松木宗満筆) 1冊
4. 同 武田本 江戸初期写
五色料紙本 1冊
5. 大倭物語 明応5年写
「御本」印記 2冊
6. 空穂物語〔宇津保物語〕 江戸初期写
徳川新子(瑩珠院)旧蔵 20冊
7. 落窪物語 江戸中期写 4巻4冊
8. 狭衣 承応3年刊 絵入本 山岸徳平旧蔵
4巻下紐・系図・目録各1巻16冊
9. 今昔物語集 江戸初期写
31巻(巻8・18・23欠)28冊
10. 大鏡〔世継物語〕 室町時代写
「御本」印記 3冊
11. 今鏡〔続世継〕 室町時代写
「御本」印記 10巻10冊
12. 土佐日記 妙寿院本 紀貫之 江戸初期写
片かな本 「御本」印記 1冊

〈源氏物語とその注釈書〉

13. 源氏物語 青表紙本 室町末期写
(伝貞敦親王等寄合書) 三条西家本
54巻目録2巻56冊
極1巻1軸
14. 同 同 天正8年写
(里村紹巴等寄合書・紹巴自筆奥書)
54巻系図1巻55冊
極2通
15. 同 同 江戸初期写
(伝八宮良純親王筆) 54巻54冊
16. 同 (松風) 鎌倉時代写
(伝越部局筆) 1冊
17. 同 (たけ河) 鎌倉時代写
(伝藤原為家筆) 1冊
18. 同 (浮舟) 鎌倉時代写
(伝藤原為家筆) 1冊
19. 原中最秘鈔 明魏耕雲(花山院長親)編
室町初期写(自筆本) 1冊
20. 光源氏系図 長享本 室町時代写 1冊

〈和歌〉

21. 古今和歌集 紀貫之等編 室町時代写 20巻1冊
22. 同 同 康正3年写
巻11-20 10巻1冊
23. 同 同 室町時代写
貞応本(嘉禄本校訂)
巻11-20 10巻1冊
24. 古今和歌集聞書 釈 宗祇 室町時代写
駿河御譲本 2冊
25. 拾遺和歌集 文明2年写(東常縁奥書)
20巻1冊
26. 金葉和歌集 源俊賴編 江戸初期写 10巻1冊
27. 詞花和歌集 藤原顕輔編 慶長7年写
田安家旧蔵 10巻1冊
28. 八代集 江戸中期写 140巻14冊
29. 三十六人家集 藤原公任編 江戸初期写 36巻36冊

〈漢詩文〉

30. 経国集 良岑安世等編 江戸初期写
「御本」印記 残欠6巻6冊
31. 菅家文章 菅原道真 江戸初期写
角倉平次献本 12巻5冊
32. 本朝無題詩 江戸初期写
「御本」印記 10巻3冊
33. 本朝文粹 藤原明衡編 江戸中期刊
14巻(巻1欠)6冊
34. 本朝続文粹 江戸初期写
「御本」印記 13巻6冊
35. 和漢朗詠集 藤原公任編 室町時代写
(伝二条為重筆) 2巻2冊
36. 同 同 室町時代写
(山崎宗鑑筆) 2巻2冊

次回は

祭礼と風俗資料展

7/21(土)~8/19(日)

中古文学略年表

年	代	書名 (編著者名)	参 考
延 暦 13	(794)		平安京遷都
16	(797)	○続日本紀 (菅野真道等) ○三教指帰 (空海)	
弘 仁 5	(814)	○凌雲新集 (小野岑守等)	
7	(816)		高野山金剛峯寺創建
9	(818)	○文華秀麗集 (藤原冬嗣等)	
13	(822)	○日本靈異記 (景戒) この年以降	最澄没
天 長 4	(827)	○経国集 (良岑安世等)	
承 和 8	(841)	○日本後紀 (藤原緒嗣等)	
13	(846)		唐・白楽天没
仁 和 4	(888)	○竹取物語、この頃以降	遣唐使廃止
寛 平 6	(894)		
昌 泰 3	(900)	○菅家三代集 (菅家文草をふくむ・菅原道真) 奉進	道真筑紫へ左遷
延 喜 1	(901)		暦亡ぶ
7	(907)		
14	(914)	○古今和歌集 (紀貫之等)	
承 平 5	(935)	○土佐日記 (紀貫之) ○この頃、倭名類聚抄 (源順)	} 承平・天慶の乱
天 慶 3	(940)	○将門記	
天 暦 5	(951)	○後撰和歌集	梨壺五人衆、万葉集に古訓を施す
天徳～天禄	(957～972)	○この頃、落窪物語 ○この間、伊勢物語	
天 徳 4	(960)		宋、興る
応和～永観	(961～983)	○この頃、宇津保物語	
天元～永延	(978～988)	○この頃、大和物語	
天 元 5	(982)	○この頃、蜻蛉日記	
長 保 2	(1000)		藤原定子皇后、同彰子中宮
寛弘2～4	(1005～1007)	○この頃、拾遺和歌集 ○和泉式部日記	
5～7	(1006～1008)	○この頃、紫式部日記 ○源氏物語一部流布	
長 和 2	(1013)	○この頃、和漢朗詠集 (藤原公任)	
3	(1014)		紫式部没 (一説 長和5年)
5	(1016)		藤原道長摂政
寛 仁 1	(1017)	○この頃、枕草子 (清少納言)	" 太政大臣
3	(1019)	○和歌十体 (源道濟)	
治 安 1	(1021)	○御堂関白記	
万 寿 4	(1027)		道長・行成没
長 元 1	(1028)	○新猿楽記 (藤原明衡) 一説 天喜・康平頃	
長元年中	(～1036)	○この頃、栄花物語正(上)編 (巻1～30)	
長暦～寛徳	(1037～1045)	○この頃、本朝文粹	
康 平 2	(1059)	○この頃、夜半の寝覚物語	
3	(1060)	○この頃、更級日記 (菅原孝標女)	
治 暦 (1065～1069)		○この頃、浜松中納言物語	} この間、前九年・後三年の役
延久4～応徳2	(1072～1085)	○この頃、狭衣物語	
応 徳 3	(1086)	○後拾遺和歌集 (藤原通俊)	
寛治6～嘉承2	(1092～1107)	○この頃、栄花物語続(下)編 (～巻40)	
寛治7～長承3	(1093～1134)	○この頃、大鏡 ○この頃以降、傀儡子記 (大江匡房)	
永 久 4	(1116～)	○朝野群載 (三善為康) ○この頃、田楽流行	
元 永 2	(1119～)	○この頃以降、源氏物語絵巻	
保安1～	(1120～)	○この頃以降、今昔物語集	
大 治 2	(1127)	○金葉和歌集 (源俊賴)	
保 延 6	(1140)	○この頃以降、本朝続文粹	宋、南遷 (徽宗、金に捕えられる)
仁 平 1	(1151)	○この頃、詞花和歌集 (藤原頼輔)	
保元1～平治1	(1156～1159)		保元・平治の乱
応保2～長寛2	(1162～1164)	○この頃、本朝無題詩	
仁 安 2	(1167)	○夜鶴庭訓抄 (藤原伊行)	平清盛 太政大臣
嘉 応 1	(1169)	○梁塵秘抄口伝集 (後白河法皇)	
治 承 4	(1180)	○この頃、今鏡	福原遷都、源頼政挙兵、同頼朝挙兵
寿 永 1	(1182)	○千載和歌集 (藤原俊成)	
3	(1184)		源頼朝、鎌倉に公文所・問注所を置く

(主として久松潜一編「日本文学史年表」および市古貞次編「日本文学年表」に拠る。)

蓬左文庫の蔵書印

その14.「田安府芸臺印」

織 茂 三 郎

蓬左文庫に直接かわりをもつ蔵書印は、前々号（No. 17）をもってほぼ終わったので、前号からは、徳川家の親藩として最も近い紀州家の南葵文庫について記述したが、今回は田安徳川家とその蔵書印をとりあげる。

田安家は、一橋・清水の両家と共に八代將軍吉宗を源とするいわゆる「御三卿」の一つで、御三家に次ぐ家柄とされた。ただし、禄高は10万石で、まとまった領地は所有しない。いずれも江戸城の北部にある田安・清水・一橋の門外に屋敷をもつところから、これらが一般的な

呼び名となっているが、本姓はもちろん徳川である。このうち田安家は吉宗の次子宗武、一橋家は同じく四子宗尹、清水家は九代將軍家重（吉宗の長子）の次子重好を祖とする。なお「寛政の改革」で有名な老中松平定信は宗武の七男にあたる。

さて、宗武は幼少より聡明で好学、荷田在満・賀茂真淵らに師事して万葉風の和歌をよくし、江戸時代有数の歌人であった。著書に「天降言」（あもりごと）その他多くの歌論があり、したがって文学関係の蔵書も多かったと思われる。石川啄木の親友の一人であった土岐善麿（旧号哀果）氏は、その評伝「田安宗武」4巻を著わし、学士院賞を受けたが、それは戦時中から戦後にわたる労作で、当時、田安家（徳川達孝氏）の資料を蓬左文庫（東京時代）が預かっていたため、土岐氏は東京・目黒の自宅からたびたび目白の本文庫を訪れて調査に専念され、私なども多少のお手伝いをした覚えがある。その時の資料は、まもなく田安家に返納されたが、これより先き、同家旧蔵の「詞花和歌集」「粉砲考」など3、4部が本文庫に入っており、それらに「田安府芸臺印」の朱印記が見える。「芸臺（うんだい）」の「芸（うん）」は虫除けの香り高い薬草のことで、当用漢字の芸（げい）とは意味がちがう。古くは奈良時代の蔵書家石上宅嗣（いそのかみ・やかつぐ）が自家の書庫を芸亭（うんてい）と称してこれを公開、わが国における図書館の初めとされたことはよく知られており、芸臺もまた書室・文庫を意味している。この印は、たて・よこ共に53mmの方形印であるが、現存するかいなか、また材質なども明らかでない。なお、田安家の資料には「田藩文庫」という印記（黒）もあるが、前記の通り、全部返却したため、本文庫には現在みられない。同家では、典籍類には「田安府芸臺印」、藩の資料には「田藩文庫」印と使い分けたように推測される。

今回は、同じく徳川親藩の一つで、いわゆる「御家門」に位置する越前松平家の蔵書印「越国文庫」について記す予定である。



「田安府芸臺印」

（元蓬左文庫調査研究員）

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S.50年刊)	3,500円	名古屋叢書三編第12巻(S.56年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S.51年刊)	4,000円	同 第8巻(S.57年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円	同 第16巻(同)	3,000円
尾崎久弥コレクション目録第一〜三集		同 第19巻(同)	3,000円
(S.52〜55年刊)	各 1,500円	同 第17巻	
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S.53年刊)	2,000円	一横井也有全集 中一(S.58年刊)	3,000円
名古屋叢書続編 索引(S.47年刊)	700円	同 第4巻	
名古屋叢書続編総目録(S.44年刊)	400円	一士林浜沔続編一(近刊)	3,000円
善本解題図録第一〜三集(S.55年再版)	各 300円	同 9巻	
日本の古典<蓬左文庫図録>(S.52年刊)	200円	一松濤棹筆(抄)上(同)	3,000円
蓬左文庫・源氏物語図録(S.53年刊)	300円	堀田文庫蔵書目録(S.58年刊)	500円
蓬左文庫所蔵古地図複製(S.55〜57年刊)		蓬左文庫図録(同)	1,500円
No.1〜No.11	各 1,800円	蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円
		御本印型書鎮(同)	1,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

利用ご案内

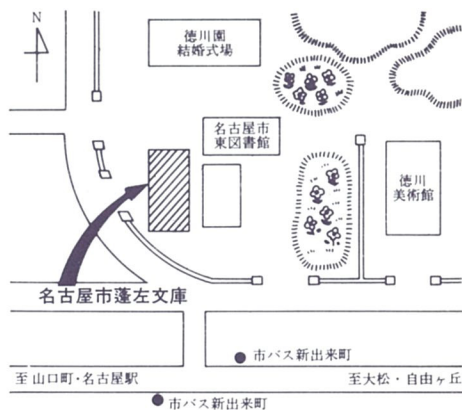
- ▷開館時間 午前9時30分〜午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 " 月・火休館
年末年始(12月28日〜1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(市バス 新出来町 北 100m)
山口町 東 500m)



「蓬左」第18号 ☆昭和59年5月12日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)